

音楽活動 — 学生の記述から保育につなぐ音楽を探る —

安 藤 昌 子
飯 田 和 也

【1. はじめに (目的)】

幼稚園では日常の生活の中や、夏に向けて七夕の会、盆踊り大会、運動会、その他発表会で、ダンス、和太鼓演奏、器楽合奏、ベル演奏、リズム遊び、ゲーム、歌唱など、さまざまな表現や音楽活動の取り組みが展開されている。

学生は、実習園での表現・音楽の取り組みの中での教師と子どものやり取りをどのような視点で観察し、先生として学生自身はどのような表現・音楽の活動に組み、どのような実践をしたのだろうか。また、実習体験から何を学んだのだろうか。

保育科学生への教育実習後のアンケートの記述から学生が学んだものを調査することと、専攻科で実践した授業を事例として、記述から見えた学生の学びを通して、保育につなぐ音楽や、保育者を目指す学生に必要な音楽の授業の方向性を探る。

【2. 教育実習後のアンケート調査】

実習終了後の学生に「実習園での音楽活動」についてアンケート調査した。

<方 法>

- ① アンケート用紙「実習園での音楽活動について」の作成

調査項目

- 1 実習園の日常生活の中での表現や音楽の取り組み
- 2 夏に向けての表現や音楽の取り組み
- 3 学生が観察したもの
- 4 学生が取り組んだもの
- 5 学生が学んだもの

- ② アンケート調査

調査対象：保育科学生 2 年生、162 名

調査時期：教育実習後 (2006 年 7 月)

<結果と考察>

アンケート調査から得られた結果を、項目に沿って 1～5 まで記入する。

1 実習園の日常生活の中での表現や音楽の取り組み

「あなたの担当は、何歳児クラスでしたか」の回答から、実習先で学生が担当したクラスは、3 歳児 - 36 名、4 歳児 - 65 名、5 歳児 - 54 名、たて割り - 7 名で、年中、年長児クラスの担当が比較的多くみられた。

1-1「日常生活の中で、園の先生は音楽を使っていましたか」についての回答では、朝の挨拶 93.2%、自由なとき (午前) 39.5%、午前の活動 49.4%、昼食・はじまり 76.5%、昼食・おわり 37.0%、自由なとき (午後) 28.4%、午後の活動 34.0%、お帰り 87.0% の園で音楽を使っていた。

学生の回答から、ほとんどの園の日常生活の中で、特に「朝の挨拶」と「お帰り」の場面では、ピアノやキーボードを伴奏として歌唱や手遊びなどの取り組みが見られた。昼食時のはじまりでは歌唱や手遊びがみられ、食事中は BGM として CD やテープを使って楽しい曲や静かな曲を流しているという回答も 45 名あった。また、午前の活動や午後の活動では、夏に向けて取り組みのある園では、CD やテープを使ったり、鍵盤ハモニカ、ハモニカ、打楽器、ミュージックベル、和太鼓などの楽器を使用して、楽器遊びやダンス、ベル演奏、器楽合奏などでの取り組みがみえた。午後の活動や自由なときに BGM を流している園もみられた。

1-2「あなたの印象では、実習園の先生は日常生活で音楽をよく使っていましたか」についての回答では、図 1 に示すように、そうだ 36.7%、普通 54.7%、ちがう 8.6% であった。

「そうだ」と「普通」の回答を合わせると91.4%で、ほとんどの園の日常生活の多くの場面に音楽が使われていることが理解できる。

「ちがう」の回答をチェックすると、「朝の挨拶」と「お帰り」には、歌唱や手遊び、BGMが「ほとんど毎日」取り入れられていたが、表現発表や活動として音楽の取り組みの計画がなかった園では、学生の印象で音楽を使っていたかという質問に「ちがう」と回答したものと思われる。

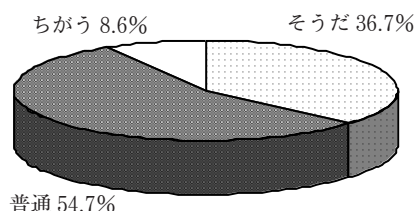


図1 日常生活で音楽をよく使っていた

2 夏に向けての表現や音楽の取り組み

「夏に向けて表現・音楽の取り組みはありましたか」について、「あった」の回答は、3歳児クラスでは、36名中13名、4歳児クラスでは、65名中29名、5歳児クラスでは、54名中28名、たて割りでは、7名中3名で、合計すると162名のうち73名(45.1%)の園が夏に向けて表現や音楽の取り組みがあったと思われる。

具体的な取り組みとして、盆踊り・七夕の会・鼓笛隊・運動会・表現発表会に向けて、ダンス・劇遊び(オペレッタ)・楽器遊び・ゲーム・器楽合奏・ベル演奏・リトミック・歌唱・和太鼓演奏の活動が見られた。他2名から、秋の運動会やクリスマス会に向けての活動も見られた。

①「物的環境で準備、用意してあったものは何ですか」では、絵本、CD+デッキ、テープ、模造紙・画用紙(歌詞を書く)、ピアノ、リズム楽器、旋律楽器(ハモニカ・鍵盤ハモニカ・ミュージックベル)和太鼓、竹の棒などが見られた。

②「子どもの反応と先生の働きかけはどうでしたか」では、以下の回答があった。(表1)

表1から、子どもの反応が「ほとんどの子が集中する」、「楽しそうな様子」のときは、先生は子どもに共感する、励ます、見守る、助言する、問いかける働きかけで、一緒に楽しむ、一緒に踊っ

て見せる、「楽しいね」「上手だね」「頑張ろうね」工夫をほめるなどの言葉掛けをする姿など、押しつけることなく活動に取り組むことができる場面がある。

子どもの反応が「もっとやりたそうな様子」のときは、先生は子どもに共感する、助言する、見守る、問いかける、励ます働きかけで、「また明日、今度やろうね」の言葉掛けをする姿がある。子どもの反応が「ふざける子が多かった」ときは、先生は子どもに問いかける、指示する、助言する、見守る働きかけで、先生は「そんなことしてよかったかな」の言葉掛けで子どもがふざける理由を話しあって聞きだそうとしている様子や子どもの興味を示す促す場面がみえた。

子どもの反応が「つまらなそうな様子」のときは、先生は子どもに励ます、問いかける、助言する、見守る、指示する、共感する働きかけで、「一緒にやってみよう」の言葉掛けがみえた。できない子どものグループに全員の先生がついて、他の子がふざけていたという例もあった。(見守りと放任)

子どもの反応が「よく分らない様子」のときは、先生は子どもに助言する、指示する、問いかける、励ます、見守る、共感する働きかけで、「これから覚えようね」「こんなふうにするのよ」の振りと言葉掛けがみえた。

夏に向けての表現・音楽の取り組み場面では、子どもが集中する場面、楽しそうにしている場面、もっとやりたい場面、ふざける場面、つまらなそうにしている場面、よく分らない場面の中で、先生が「共感する、励ます、見守る、問いかける、助言する、指示する」という働きかけがあり、子どもに押しつけない実践に近づける教師の援助、指導の工夫を、学生は観察している。

③「人的環境で先生のモデルはどうでしたか」では、1. 分りやすい説明22.7%、2. 意欲がもてる示し方16.7%、3. 楽しそうな姿21.1%、4. 難しそうな姿4%、5. 失敗する姿(歌うとき、説明のとき)5.2%、6. 他の子をほめる姿23.9%、7. 他の子をしかる姿8.0%、8. その他0.8%あった。「その他」では、「先生が先生に『違う』などと子どもの前で言っていた」の補足があった。

図2「先生のモデル」のグラフから、学生は教

表 1 子どもの反応と先生の働きかけ

子どもの反応	先生の働きかけ 中身（多い順）と具体的な働きかけ
ほとんどの子が集中する	共感・[助言・問いかけ（同数）]・指示・はげまし・見守り（放任なし） ・先生が前で踊ってみせた（3 歳児）・しっかり踊っている子をほめて、他の子の意欲を促す（4 歳児）・始める前に約束を確認してから行ったために集中できたと思う・間違えやすいところは必ず弾く前に指導していた（5 歳児）・子どもの発達にあわせて援助方法を変えていた（たて割り）
楽しそうな様子	共感・はげまし・見守り・問いかけ・助言・指示（放任なし） ・「楽しいね」「頑張ろうね」と言葉をかけていた・一緒に楽しく踊っていた（3 歳児）・歌や踊りの前に話をして楽しく取り組める援助をしていた。ほめてのばす感じだった・室内でも屋外でも楽しそうに踊っていた（4 歳児）・前回と比較して誉めていたので、みんな喜んだ様子。照れている子もいた・一緒になって「すごいね」「ここはどんな音がする？」などと子どもの興味をひいていた（5 歳児）
もっとやりたそうな様子	共感・[助言・見守り（同数）]・問いかけ・はげまし（指示・放任なし） ・共感して「また明日やろうね」と言って子ども達と約束をしていた・歌い終えてから「もう 1 回」という子がたくさんいた（3 歳児）・「またやろうね」と期待を持たせていた（4 歳児）・もう帰る時間だったので「残念」とみんなで言っていた（5 歳児）
ふざける子が多かった	問いかけ・指示・助言・[見守り・放任（同数）]・[共感・はげまし（同数）] ・自分で踊りだす子がいた（3 歳児）・子どもが興味を示せるよう言葉掛けをしていた・どうしてもふざけてしまうか話し合っていた（4 歳児）・暑かったので何回もやらないようにして一緒に歌い踊っていた（5 歳児）
つまらなそうな様子	はげまし・[問いかけ・助言（同数）]・[見守り・放任（同数）]・指示・共感 ・話しかけてそのこが踊れるように援助していた（3 歳児）・個別に教えていた・毎日厳しい練習なので楽しいなどの気持ちはなさそうだった（4 歳児）・鼓笛の練習中に全員の先生ができないパートに集中して他の子どもがつまらなそうにふざけていた（5 歳児）
よくわからない様子	助言・指示・[問いかけ・はげまし（同数）]・見守り・共感（放任なし） ・「これから覚えようね」と声をかけていた（3 歳児）・分りやすい言葉で話し、一緒に動く（4 歳児）・指示が難しい・「こうだよ」と丁寧におしえていた（5 歳児）・リズムが難解で子どもの理解度も違い、パートごとに細かい指導をしていた（たて割り）
そ の 他	はげまし・共感・助言（問いかけ・指示・放任なし） ・暑くて集中できなくなると「もうすこしだから」と励ましていた（3 歳児）・あと少しやったら休憩ね（疲れている）（4 歳児）・自由遊び中などに子どもが自主的に口ずさんだり練習している姿がみえた（5 歳児）

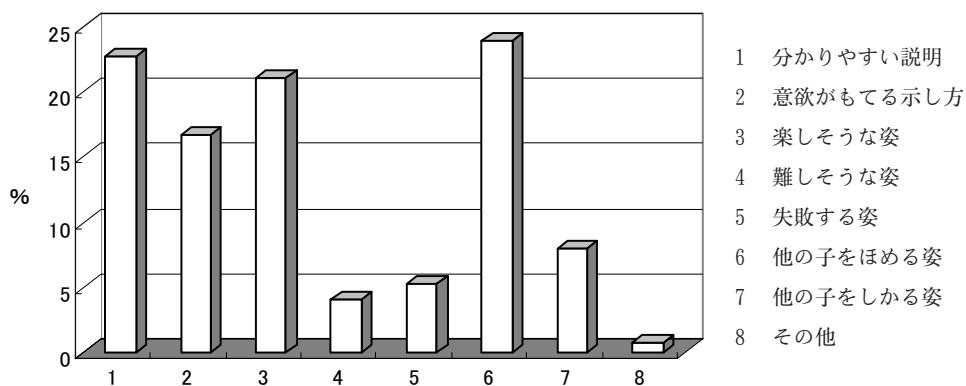


図 2 先生のモデル

師の「分りやすい説明」「意欲がもてる示し方」「楽しそうな姿」「他の子をほめる姿」の場面を多く観察している。「他の子をしかる姿」では、終了後にできたことや頑張ったことに対して先生が子どもを「ほめる」場面として観察していた。

3 学生が観察したもの

①「実習園がやっていた表現・音楽の取り組み」では、「積極的に取り組んでいた」についての回答は、「そうだ」77%、「どちらでもない」15.8%、「ちがう」7.2%であった。

「教材が工夫されていた」についての回答は、「そうだ」41.7%、「どちらでもない」50.4%、「ちがう」7.9%であった。

取り組みでは、「そうだ」と「どちらでもない」を合計すると97.8%、教材の工夫では、「そうだ」と「どちらでもない」を合計すると92.1%で、ほとんどの実習園が積極的に取り組み、教材も工夫されていたことが理解できる。

②「学校で習ったものと違って活動はありましたか」については、17名から表2の回答があった。

本学はキリスト教主義の養成校であるため、礼拝で賛美歌を歌う体験はあるが、実習園での礼拝の方式の違いを指摘したものと思われる。「絵本・紙芝居」「遊戯・ダンス」「歌唱」「手遊び」の活動については、実践方法の具体的な違いを指摘したものと思われる。「和太鼓」「ハモニカ」の演奏

はこれまでに子どもが演奏している体験の無い活動を観察した結果、「違う」と回答したと思われる。

③「学校でもっと教えてほしいと思う活動」について、学生の回答と割合は、ダンス6.1%、劇遊び（オペレッタ）14.6%、楽器遊び9.6%、ゲーム13.1%、器楽・ベル演奏7.1%、リトミック38.9%、歌唱7.6%、和太鼓2.0%、お琴1.0%、その他0%の回答があった。

学生が教えてほしいと思っている活動の具体的内容は、多く記入された回答を表3にまとめた。

表3から、「学生が教えてほしい」と思っている活動はダンス、オペレッタ、楽器遊び、ゲーム、器楽・ベル演奏、リトミック、歌唱、和太鼓演奏、お琴を挙げていた。学生が何を教えてほしいかをみると、「具体的内容」から、それぞれの活動の基本的なものについて知りたいと思っていることが理解できる。学生の入学以前の音楽経験はさまざまではあるが、音楽経験の比較的長い学生であっても保育で扱う音楽をどのように指導、実践するのかを押さえきれていないのが現状であるようだ。

また、図3からは、学生は最も大きな数値でリトミックを学校で教えてほしい活動として挙げている。どんな活動なのか知りたい、教えてほしいと思っているようだ。回答からも実際に多くの園では、リトミックを取り入れているところが多いことが理解できる。

表2 学校で習ったものと違って活動

違って活動	具体的内容
お祈り	部屋を暗くしてBGM（静かな曲）にあわせて線状歩行やお祈りをする
絵本・紙芝居	テープの歌にあわせて「あおむし」の絵本を開きながらみせていた お帰りのバスを待っているだけ読んでいた
遊戯・ダンス	毎朝30分、10曲ほど手遊びも入れた遊戯をやっていた 朝の体操として動くことを楽しむ感じでやっていた
歌唱	楽しく歌えるように動作をしながら歌っていた・決まった歌はあったが子どもが「～うたいたい」という曲を取り入れていた・聖歌がほとんどだったので少し戸惑った
手遊び	1つの手遊びを何回もやることがなかった・ピアノを使ってやっていた・メロディも示し方も習ったものと異なっていた・朝の挨拶に盛り込まれていた・全くやらなかった
和太鼓	きちんとした姿勢で決められた曲を打っていた・礼儀作法をきちんとやっていた
ハモニカ	手を使ってドレミを表していた

表 3 学校で教えてほしい活動

教えてほしい活動	具体的内容 (何を教えてほしいか)
ダンス	曲にあった振り付けや身体の動かし方を身につけたい
劇遊び (オペレッタ)	基本的なことを学びたい・どうやって子どもに伝えるのか・やってみたい・どうしたら楽しんでできるのか・いやな役や余ったときどうしたらいいか
楽器遊び	音を使った遊びを沢山知りたい・音楽を使ってリズミカルに遊べるもの・いろんな楽器で遊びたい
ゲーム	・いつでも子ども達と楽しむことができるように沢山知りたい・ピアノを弾き曲に合わせながらやれるゲームを知りたい・音楽を取り入れたゲームを知りたい・爆弾ゲームの伴奏としてピアノを弾いていたが、どうやったら音楽をゲームに取り入れることができるか知りたい
器楽・ベル演奏	普段触れることのない楽器を使いたい・どうしたら楽しくできるか・演奏がしたい・手作り楽器で演奏したい・教え方をどうしたらいいか
リトミック	どのような活動をしているのか知りたい・取り入れている園が多いのでやってみたい・子どもが楽しそうにやっていたので使えそうな曲をやってほしい・リズムに合わせて動くことをやってみたい・指導方法を知りたい・音作りと活動
歌唱	みんなで合唱がしたい・いろんな曲を歌いたい・子どもと一緒に歌える歌をもっと知りたい・歌が上手になりたい
和太鼓演奏	演奏したい・パチの打ち方をマスターしたい・盆踊りや運動会に使えそうなのでやりたい
お琴	どのような活動をしているのか知りたい
その他	就職にでるもの

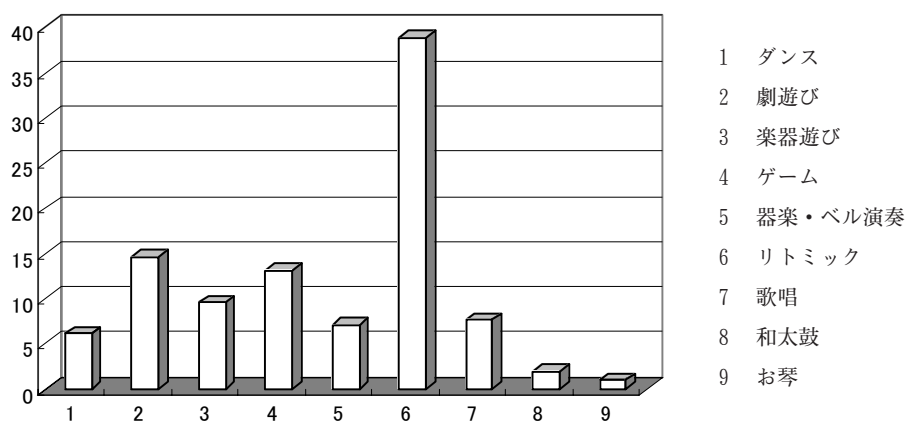


図 3 学校で教えてほしい活動

4 学生が取り組んだもの

「実習園であなたがやった表現・音楽の取り組みは何ですか」について、半数を超えた 54.9% の学生から音楽や表現を実践したと回答があった。

「実践時に大切にしたいものをかいてください」では、学生が大切にしたい「働きかけ」の内訳は、

年齢別では以下ようになった。

大切にしたいものを総合すると、表に示す通り多い順から「共感⇒見守り⇒問いかけ⇒助言⇒はげまし⇒指示命令」となり、内訳は、最も多かった「共感」は 30.4%、「見守り」は 17.8%、「問いかけ」は 17.0%、「助言」は 16.6%、「はげまし」

音楽活動

表4 学生が大切にしたい働きかけ

ク ラ ス	働きかけの中身 (多い順)
3 歳 児	共 感 ⇒ 見守り ⇒ 問いかけ ⇒ 助 言 ・ はげまし (同数) ⇒ 指 示
4 歳 児	共 感 ⇒ 助 言 ⇒ 問いかけ ・ 見守り ・ はげまし (同数) ⇒ 指 示
5 歳 児	共 感 ⇒ 助 言 ⇒ 見 守 り ⇒ 問いかけ ・ はげまし (同数) ⇒ 指 示
たて割り	共 感 ・ 問いかけ (同数) ⇒ 助 言 ・ 見守り (同数)
総 合	共 感 ⇒ 見守り ⇒ 問いかけ ⇒ 助 言 ⇒ はげまし ⇒ 指 示

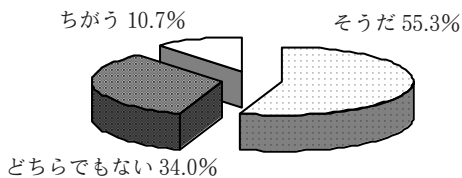
は13.1%、「指示」は5.1%の数値が出た。学生は子ども達の援助・指導で子どもに「共感する」ことをもっとも大切な働きかけとしていることが理解できる。

5 学生が学んだもの

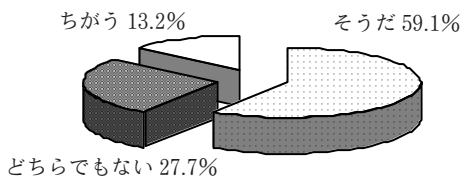
① 実習園でやっていたこと

学生が観察したものを15項目挙げ、5段階[そうだ+2 +1 どちらでもない0 ちがう-1 -2]に分けてあてはまるものに○をつける方法で質問をした。15の項目と学生の回答の内訳は以下の通りである。

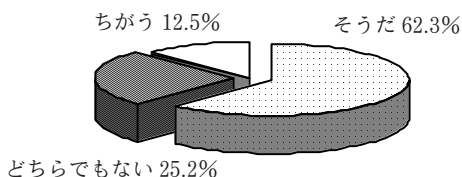
1 実習園での活動のための立案は十分だった



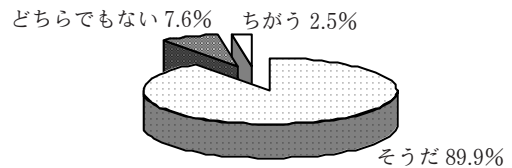
2 実践のための音楽の準備は十分だった



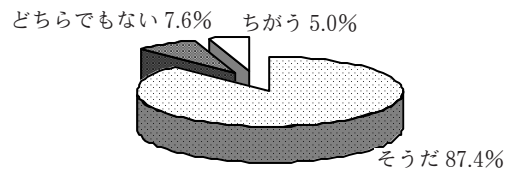
3 子どもが聞いている場面をよく見た



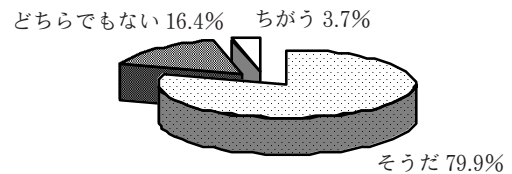
4 子どもが楽しんでいる場面をよく見た



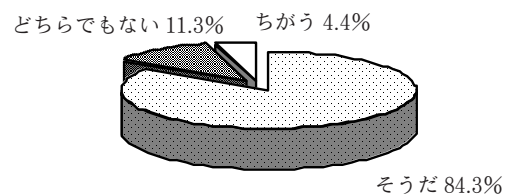
5 教師は子どもと一緒に楽しんでいた



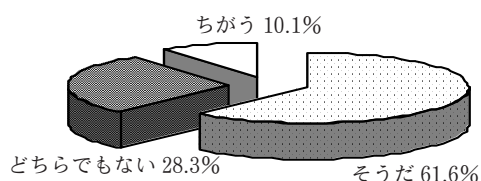
6 子どもが（友達や教師の）まねをする場面をよく見た



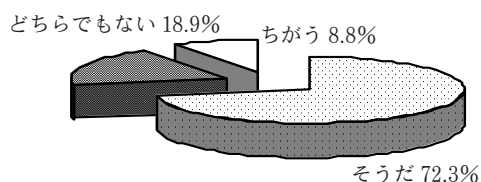
7 教師が共感する場面をよく見た



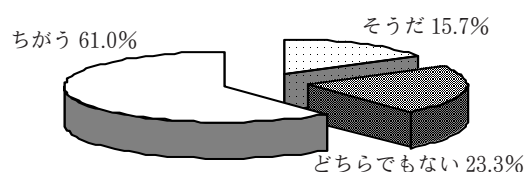
8 子どもが自分なりに工夫する場面をよく見た



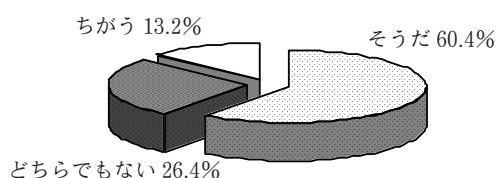
9 子どもの工夫を教師が誉める場面をよく見た



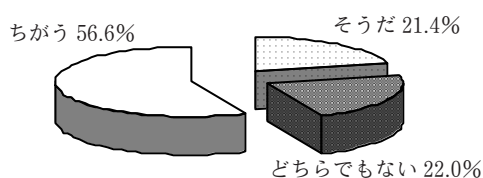
10 やりたくない子、できない子を叱っていた



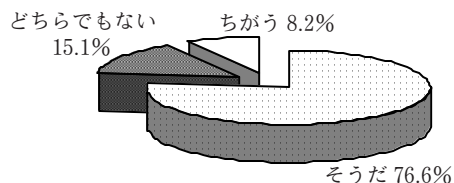
11 上手にさせるための教師のこことば掛けの場面をよく見た



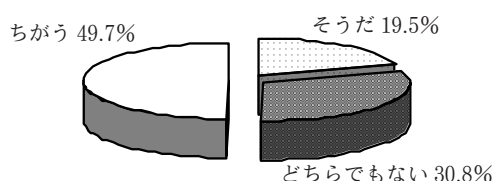
12 教師はできるまでやらせていた



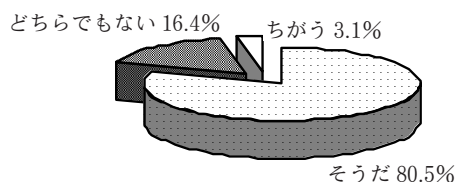
13 頑張るためのこことば掛けの場面をよく見た



14 教師が叱咤激励している場面をよく見た



15 終了してから教師が誉める場面をよく見た



学生の回答から、「そうだ」と「どちらでもない」を合わせた数値をみると、項目1、実習園でやった立案は89.3%で十分だった。項目2、音楽の準備は86.8%で十分だった。項目3、子どもが聞いている場面は87.5%がよく見た。項目4、子どもが楽しんでいる場面は97.5%がよく見た。項目5、モデルとしての教師は95%が子どもと一緒に楽しんでいた。項目6、子どもが友だちや教師の真似をする場面は96.3%がよく見た。項目7、教師が共感する場面は95.6%がよく見た。項目8、子どもが自分なりに工夫する場面は89.9%がよく見た。項目9、子どもの工夫を教師がほめる場面は91.2%がよく見た。項目10、やりたくない子できない子を叱っていたは、「そうだ」15.7%、「どちらでもない」23.3%、「ちがう」61%で、教師が子どもを叱る場面と終了後に頑張ったことをほめている場面を見た。項目11、上手にさせるための教師の言葉掛けの場面を86.8%がよく見た。項目12、教師はできるまでやらせていたは、「そうだ」21.4%、「どちらでもない」22%、「ちがう」56.6%で、約2割の学生ができるまでやらせていたと見ていた。項目13、頑張るための言葉掛けの場面は「そうだ」76.6%、「どちらでもない」15.1%、「ちがう」8.2%がよく見た。項目14、教師が叱咤激励している場面は「そうだ」19.5%、「どちらでもない」30.8%、「ちがう」49.7%がよく見た。項目15、終了してから教師が誉める場面は96.9%がよく見たと回答している。

表5 表現を与えるときに押さえておきたい事項：抜き出した言葉

工夫 ほめる 認める 楽しむ 共感 達成感 確認 見守る 真似る 見せる モデル 言葉掛け 手本 メリハリ タイミング 援助 頑張る 説明 配慮 意欲的 雰囲気 約束（ルール） 叱らない 強制しない 普段の様子 やりたい気持ち 興味 自分から～ 一人ひとり 水分補給 立案・環境構成 準備 環境作り 音楽の準備 導入 年齢・発達 ねらい 予想
--

表6 「実践と先生の働きかけ」と「指導計画」

実践と先生の働きかけ	工夫、ほめる、認める、楽しむ、共感、達成感、確認、見守る、真似る、見せる、モデル、言葉掛け、手本、メリハリ、タイミング、援助、頑張る、説明、導入、配慮、意欲的、雰囲気、約束（ルール）、叱らない、強制しない、やりたい気持ち、興味、自分から～、一人ひとり、環境作り
指導計画	立案・環境構成、準備、音楽の準備、年齢・発達、ねらい、予想、普段の様子

②「幼児に表現・音楽の活動を与えるときに押さえておきたい事項を5項目書いてください」から得られた回答から多く出た言葉を抜き出し、表5にまとめた。

表5から、抜き出した言葉をまとめると、「実践と先生の働きかけ」と「指導計画」に分けることができる。それぞれを分類し、表6にまとめた。

「実践と先生の働きかけ」の中身は、ほとんどの学生が回答していたが、「指導計画」に視点をおいて学生の回答数をみると、立案・環境構成(17)、準備(24)、音楽の準備(5)、導入(5)、水分補給(4)であり、指導計画を「幼児に活動を与えるときに押さえておきたい事項」と捉えている学生の人数が決して多いとはいえないということを理解した。

6 回答をまとめる

学生は、実習園の日常生活や夏に向けての表現や音楽の取り組みの中で、教師が子ども達のモデルとなって音楽を楽しんでいる場面や、やり方を示している場面を観察した。そして、教師が「共感する・助言する・受け入れる・見守る・励ます・問いかける・慰める」働きかけと子ども達の反応を観察した。

また、学生が教師として実践した活動で、もっとも多かった働きかけは「共感」で、学生が子どもの心に寄り添い共感することを大切にした実践を心がけたことが理解できる。

回答から、学校で習ったものと違う活動と、学

校でもっと教えてほしいと思う活動でリトミックを多くの学生が挙げていた。前者は実践が習ったものと違う、後者は学生のリトミックへの興味が高いことを伺わせる。両者とも学生が表現や音楽の体験が浅く、実践のための「ネタ」を仕入れることに視点が向いているのではないと思われる。観察と実践から、表現や音楽の活動を与えるときに押さえておきたい事項に、立案、環境構成、準備を回答した学生は多いとはいえない。

幼稚園教育要領第3章から、指導計画は、子どもの「発達に即して一人ひとりの幼児にふさわしい、～具体的なねらい及び内容を明確に設定し、適切な環境を構成することなどにより活動が選択・展開されるようにすること」⁽¹⁾とある。活動に取り組むとき、指導計画の立案は、一人ひとりの子どもの発達を押えた実践や、教師が戸惑うことなく子どもへの柔軟な働きかけ、援助ができるための事前の準備として重要である。

回答から、学生は立案、環境構成、準備項目よりも、実践のほうを重視していることを理解した。

「5 学生が学んだもの」から1～15の図を見渡すと、4「楽しんでいる」5「子どもと一緒に楽しむ」6「まねをする」7「共感する」9「工夫を誉める」13「頑張る言葉掛け」15「終了後誉める」は、「そうだ」72.3%～89.9%で「ちがう」2.5%～8.8%で、よく似た形ができています。続いて、3「聞いている場面」62.3%、8「工夫する場面」61.6%、11「言葉掛け」60.4%も比較的似た形の図である。

10「叱っていた」12「できるまでやらせていた」は、「そうだ」15.7%と21.4%、「どちらでもない」23.3%と22%、「ちがう」61%と56.6%と、数値の多少の違いはあるが、図を見るとよく似た形ができています。

音楽を使った活動の中で学生は、3「子どもが聞いている場面」4「子どもが楽しんでいる場面」5「教師が子どもと一緒に楽しんでいる場面」6「子どもが(友だちや教師の)真似をしている場面」7「教師が(子どもに)共感する場面」8「子どもが自分なりに工夫する場面」9「子どもの工夫を教師が誉める場面」11「上手にさせるための教師の言葉掛けの場面」13「頑張るための言葉掛けの場面」15「終了してから教師が誉める場面」を観察した。10「やりたくない子をしかっていた」12「教師はできるまでやらせていた」の「そうだ」の数値が比較的少ない回答からも、学生は教師の「子ども達のやろうとする意欲を大切」にした実践を観察した様子である。

活動の中で子どもが教師の言葉を聞こうとしているとき、取り組みの中で先生や友達の動きを自分から真似しているとき、上手にできなくても自分なりに工夫しているとき、子どもは知的発達をしている。音楽を通した活動の中で、子どもが自発的に環境に関わろうとする力を育てる場面から、子どもが「自分から〇〇する」いった自発的に関わる力や、生きている喜びや生きていたいという意欲に結びつく環境を構成している教師の工夫を学生は観察した⁽²⁾。

【3. 事例：簡易伴奏「さんぼ」で動く】

専攻科の授業では、事前に簡易伴奏「きらきらぼし」でリトミック「動きのリズム」の体験をした。次に「さんぼ」を使って各自が動きの合図を考案して実践した。それぞれの実践後に全員から批評を受け、各自の実践内容と反省を記述し、後日提出させた。学生の記述から見えた学びを通して、保育者を目指す学生に必要な音楽の授業の方向性を探る。

＜授業の内容＞

導入1 簡易伴奏「きらきらぼし」を使ってリトミック「動きのリズム」を体験する

導入2 簡易伴奏で「さんぼ」の演奏ができるよ

うにする

課題：「さんぼ」を使って「動きのリズム」の実践をする。(合図を2種類ほど入れること) 一人ひとり順に実践する。直後に全員からの批評を受け、後日、実践した活動内容と反省や見えたことをまとめて提出する。

＜学生の記述(反省・みえたこと)＞

- ・導入から終りまで流れを考えていなかった
- ・説明のとき環境(机が周りにある、友だちを押すとあぶないなど)も伝えるべきだと思う
- ・事前にきちんと計画してくる必要があった
- ・子どもが楽しめるような設定を考える必要がある
- ・曲事体をしっかり頭に入れておかなければ子ども達が動くときに困ってしまう。自分では練習したつもりでもまだまだ足りないと感じた
- ・練習と実際とは大きく違うということを改めて知った
- ・他の人の実践を見てバリエーションを増やしたほうがよいと思った
- ・分りやすい言葉掛け、子どもに伝わる言葉
- ・ルールを作る必要がある
- ・音の合図が多かったので覚えることに集中して音楽を楽しむことができなかったようだ
- ・合図が似ていると迷うので、特徴ある合図を考える必要がある
- ・「さんぼ」のようにいろんな曲を用いて行ってみたいと思う
- ・弾くことに注意が向いて言葉掛けができなかった
- ・子ども達が動きやすいかどうかということも考えなくてはいけない

＜考 察＞

実践した「動きのリズム」は、学生が先生役と子ども役に分れ、子ども役の学生が先生役のピアノの音に合わせて動くものである。先生役が事前に考えてきた合図で子ども役の動きが変化する。子ども役は、動きの中で音楽の楽しさを味わうと共に、拍子や先生の合図で身体の動きを変化させることを楽しむ表現活動である。先生役には、活動のための事前の計画と、ピアノ演奏の準備が必

要である。先生役のピアノの演奏や合図で、子ども役が動いて音楽の楽しさを実感できたかどうか、また、どうしたら音楽の楽しさを味わうことができるかを各自が動く体験を通して学ぶものである。実践風景はどのようなものであっただろうか。まず、活動のための事前の計画、準備が不足しているため、具体的な流れを把握できていない。その結果、先生役は次につなぐ説明や子ども役を次の動きに移すための合図のタイミングに迷いを見せている場面がしばしばみえた。

学生のこれまでの「動きのリズム」の体験は3回ほどである。

先生役が「さんぽ」の曲を途中で止まらずに満遍なく演奏できなくては、子ども役は気持ちよく動くことができない。また、演奏をベースにして、合図の言葉を掛けたり音を出したりすることは、十分な準備と練習が必要であることを学生は改めて理解したと思われる。

事例の活動ではピアノを使用した、他の楽器に置き換えた実践も可能である。保育のための音楽の技術は、ピアノやキーボードを使った演奏だけではない。むしろ、保育のためには、ピアノ以外の楽器の扱いや、楽器を使った遊びや楽器を使った活動を視野に入れておきたい。

ピアノやキーボード、ギター、バイオリン、管楽器、民族楽器、いろいろな打楽器、手作り楽器、身体も含めると保育で扱う楽器の選択肢は多様であることを学生には理解してほしいと思っている。そして、ピアノの演奏技能にこだわらないで、楽器を使った音楽の技術は多様であることを、毎回の授業を通して学生に伝えることも大きな課題である。

【4. 考 察】

生きる力を育てる実践

子ども達は、音楽に親しみ、みんなと一緒に聴いたり、歌を歌ったり、踊ったり、リズム楽器を使ったりして楽しむ⁽³⁾。子ども達が楽しいと思う音楽とは、どんな音楽だろうか。

音楽の指導で子ども達が歌を歌うとき、保育者は歌詞を正しく覚えさせること、正しい音程やリズムで歌うことを身につけさせること、大きな声で歌わせることを指導していないだろうか。器楽

合奏やリズム遊びで楽器を扱うとき、保育者は正しい奏法を覚えさせること、正確なリズムや音を出させること、間違えないで演奏することだけを指導していないだろうか。

どのような指導が、歌うことは楽しい、楽器を鳴らすことは楽しい、できてよかった、またやりたいと思う音楽の指導になるのだろうか。

音楽、表現を使った活動を実践するとき、保育者が上手に教えることを教育と思い込んで子ども達と触れ合っていると自信をなくしてしまうという結果になることがある。

上手にできない子どもには、保育者は「～させる」ことにこだわってしまいがちである。そして、できない子どもは意欲をなくしたり、保育者を無視したりした反抗した態度をとるようになる。

また、上手にさせる教育やしつけといった子どもとの触れ合いだけでは、できる子どもにとっては楽しいと思い、意欲につながる活動も、できない子どもやどんなに努力してもできない子どもにとっては、劣等感を抱く活動になりかねない。

教育のねらいは「生きる力の基礎」となる「心情・意欲・態度」を育てることである。「困難に出会っても逃げないで自分で乗り切る力」「自分の意思で判断する力」を育てることである⁽⁴⁾。保育者が一人ひとりの能力を認めることや、子ども達が自分なりに工夫して、自分なりに歌ったり、自分なりに踊ったり、自分なりに楽器をならしたりするといった、子ども達が「自分なりに○○する」という自分から関わっている姿を認めて、さらに、できたところを「～工夫したね」「～できたね」と一人ひとりの子ども達の知的発達していることに共感することを、子どもの「生きる力」を育てる教育として大切にしたい⁽⁴⁾。

保育につながる音楽の技術について

幼稚園教育要領の領域「表現」を充たす音楽の授業に求められるものは何か。

ある養成機関の教員は、保育科の学生の音楽指導（特にピアノ学習について）が抱える問題点として、①ピアノ技術習得 ②保育につながる音楽 ③学生の音楽的感性の3点を挙げている⁽⁵⁾。まとめでは、①について、ピアノ演奏の能力育成が保育者の資質として機能するような指導 ②につい

て、ピアノ演奏が保育との関わりで活かされる場③について、ピアノ演奏の真の楽しみ方や音楽の面白さを体験していない学生に、音楽の楽しみ方を指導する必要性を述べている。

保育科の学生を対象とした音楽の授業は、保育者に必要とされる音楽の基礎技能の育成と、保育につながるための音楽の指導を内容としている。

保育者自らが、歌を歌って楽しい、楽器を鳴らして楽しい、音楽は面白い、自分で工夫して楽しい、打ちたいという音楽体験を十分しており、併せて柔軟な実践の技術を備えており、音楽で表現することの楽しさや面白さを知っていることで、子ども達が歌って楽しい、楽器を鳴らして楽しい、面白いと感じ、自分で工夫して歌いたくなる、打ちたくなるような関わりを大切にしたい指導が生まれるのである。音楽の楽しさや面白さを子ども達と一緒に味わうことができる保育者は、十分な音楽体験をしているといえるのである。

それでは、学生はこのような「音楽は楽しい」という体験をしているだろうか。

学生の実習後のアンケートから、又、実習園の日常生活や夏に向けての取り組みから、子ども達が「音楽は楽しい」と思う教師の働きかけを学生は観察した。事例：簡易伴奏「さんぽ」で動くでは、「音楽は楽しい」と思うためには、活動を実践するときに事前の計画が重要であることや、実践のための音楽の準備も併せて必要であることを学生は学んだ。

音楽の授業で歌を歌うとき、歌詞を正しく覚えさせること、正しい音程やリズムで歌うことを身につけさせること、大きな声で正確に歌うこと、器楽合奏などで楽器を扱うとき、正しい奏法を覚えさせること、正確なリズムや音を出させること、間違えないで音楽的に演奏する指導は基礎技能の育成として大切である。

しかし、基礎技能の向上だけを目的とした授業で、学生は「音楽は楽しい」という体験ができているのだろうか。

歌を歌うことは楽しい、楽器を鳴らすことは楽しい、合唱でみんなと歌えてよかった、楽器を鳴らしてよかった、器楽合奏ではみんなで演奏できた、達成感が味わえた、またやりたいと思う体験をすることで、「音楽は楽しい」「子ども達とやりたい」につながる。

保育科の学生を対象とした音楽の授業では、授業の内容を学生が「音楽は楽しい」「音楽は面白い」と思う音楽体験にする工夫を大切にしたい。学生一人ひとりが「音楽は楽しい」という体験が、「子ども達と歌いたい」「子ども達と楽器を鳴らしたい」「子ども達とやりたい」と思う、保育につながる音楽の楽しみ方を知っている豊かな感情を備えた保育者を育てるのではないか。

【5. おわりに】

音楽経験の浅い多くの学生にとっては、音楽を使った活動の一つ一つが新しい体験となる。保育実践のための音楽について、音楽の授業の中で学生が体験した一つ一つの活動が、保育につながるものとなるような「音楽は楽しい」という内容で、与えられた学生にとって新鮮な興味を引く活動となるような工夫が必要である。

保育につながる音楽の授業では、このような視点を押えた指導を今後の音楽教育の課題として取り組んでいきたい。

【文献】

- 1) 幼稚園教育要領
- 2) 飯田和也 一人ひとりを認める保育北大路書房 P. 9~10
- 3) 幼稚園教育要領 保育所保育指針 領域「表現」
- 4) 飯田和也 一人ひとりを認める保育北大路書房 P. 4
- 5) 荒木紫乃 日本保育学会第 59 回論文集 P. 964~965 「保育者養成期間における音楽の授業が抱える悩み — 領域表現からの一研究 —」

Musical Expression

— A Study on Music Relating to Infant Education, through the Analysis of the Student's Comments —

Ando, Masako*

Iida, Kazuya*

教育実習後の学生のアンケートから、幼稚園の日常生活や夏に向けての表現・音楽の取り組みの中で、教師が子どもに共感する働きかけで、子ども達と一緒に音楽を楽しんでいる教師の援助、指導の工夫がみえた。実習園で学生が先生となって実践した取り組みの中では、子ども達に「共感する」ことをもっとも大切な働きかけとして、子ども達と音楽を楽しんでいる実践を記述から理解した。子ども達が「自分なりに〇〇する」知的発達していることに教師が共感することは、「生きる力」を育てる教育として大切にしたい。専攻科の授業では、学生が先生役と子ども役になって、先生役のピアノの音にあわせて子ども役が動く演習をした。子ども役の動きが音楽を楽しむ実践になるために、事前の計画や実践のための準備の必要性を実感したことを、学生の記述（反省・みえたこと）から理解した。実習後のアンケートと演習後の記述から、学生が子ども達と一緒に音楽を楽しむ実践の技術の必要性を実感していることが理解できる。

保育科の学生を対象とした音楽の授業では、基礎技能の育成とともに学生が「音楽は楽しい」「子ども達とやりたい」と思う体験を授業に取り入れる工夫が、保育につながる音楽の教育で大切にしたい課題である。

キーワード：音楽，共感，楽しむ，生きる力，保育科